資料紹介

加制三百首

宮内庁書陵部に『加制三百首』（書陵部函号五〇一・七六〇）と題する歌集一冊を所蔵する。

本書は、所収する和歌と奥書の内容からみて、間違いなく第百十二代霊元天皇の御製である。しかも、筆跡は、いわゆる霊元院御流の気品の高い風格と流麗な御書風が拝察せられ、当部所蔵の天皇の宸筆類との対比からも、明らかに霊元天皇の宸筆と認められる。このことについては、昭和六十一年『和歌大辞典』（明治書院刊）の本書の解説において、その概要を記したことがある。

この三百首は、享保十七年二月上旬から詠み始められ、天皇の御悩が増進せられ、已むなく御詠の延引を御決意される時期、即ち、前二箇度の百首の御詠の所要日数から推測して、六月下旬頃までに終功せられたと思われる三箇度の百首の定数和歌である。各百首は、次のような部立によって構成されている。

㈠百首（享保十七年自二月上旬至三月下旬終功）

部立　春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋二十首、雑二十首

㈡百首（同年自四月中旬至閏五月上旬終功）

部立　春十五首、夏十首、秋十五首、冬十首、恋五十首

㈢百首（自閏五月下旬始之）

部立　春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋二十首、雑二十首

㈠の百首は、既に他本によって『名所百首』と題して、『列聖全集』の御製集第十巻に掲載されてよく知られている。しかしながら、その他の㈡と㈢の百首並びに各百首巻末の奥書に関しては、何故か今まで見過されてきた。それ故に従前から『名所百首』の御製が、天皇崩御五ヶ月前の御製として注目もされていた。しかるに、本書の存在が確認されたことによって、崩御二ヶ月前頃の御製が存在することが分った。また、本書によって、『名所百首』の欠落箇所を補い、そして御悩のことについては、五月二日の御悩の記事が諸記録の初見であるが、本書奥書によれば、二月中旬頃からの御不例であること（三月下旬終功の百首奥書中に先月中旬と記すことから推測）、さらには御病状の一端や、本百首の御詠の御企図及至歌道に対する御姿勢、そして本書が御悩中の御詠であること等は、殊に注目に値する新しい事柄である。

天皇は、歴代天皇の中でも秀でた歌人と称され、当代宮廷歌壇におけ

る実力者でもあらせられた。したがって、近世和歌文学史上、また、天皇の御事蹟上の資料としても貴重なものである。こゝにその全文を翻刻紹介することゝした。

先ず、本書の書誌は、縦二十七・三糎、横二十・三糎の袋綴一冊。表紙は、打曇り漉き出しの鳥の子紙で、表紙左上に霊元天皇の宸筆をもって「加制三百首」と外題を直書。本文用紙は楮紙、墨付三十枚、本文前に遊び紙三枚と、後に七十八枚合わせて八十一枚の白紙がある。全枚数の百十一枚目、つまり巻末から数えて二枚目の右下に「皇統文庫」の単画方朱印が捺印されている。これは伝本が御所本乃至禁裏本であることの証左でもある。この御印には、後西・桜町・孝明天皇のお作りになられた三種類が存するという。そのうちの二種類については、当部蔵書及び写真版等によって比較確認することができる。その一は、光格天皇宸翰（帝室制度史六所収図版）、『中臣祓瑞穂鈔』（書陵部函号五五八・八五）、『古語拾遺』（書陵部函号五五八・九九）等に捺印されたものとは、大きさ、書体とも全く異なるもので、明らかに別種であることが認められるが、後の一は称光天皇宸翰（宸翰英華所収『論語抄』）、『伊勢物語闕疑抄』（書陵部函号桂・五〇）、『元元集』（書陵部函号五五八・八四）等及び後西天皇の御印（日本図書館史所収図版）と称されるものと極めて類似する。恐らく同種の御印であろう。しかし、本書を成した享保十七年という時期は、後西天皇崩御後のことになるから、捺印された天皇は、霊元天皇以降の天皇ということになる。また、巻頭に当部蔵書印の「図書寮印」の方朱印がある。

一面十一行書（本文十五枚目は、十二行書）、内題、部立、歌題、和歌とも一行書、部立一字下り、歌題三字下り、各百首巻末に奥書を記す。その『名所百首』の奥書に「四月十三日草之、此一巻尤至而草稿也」の「草稿」と言う記事と、七十八枚もの白紙を余す状態からみて、未定稿本の体裁ではあるが、一応外題が書かれているので、草稿本によって御清書された清書本とみたい。恐らく最後の百首の御歌をお詠みになられて御延引を御決意されて間もなく御清書され、六月末頃には終えられたものと思われる。その後七月十二日には、御機嫌奉伺の将軍使にも「不及御対面」（院中番衆所日記）と記されるほどの御病状となられている。

本書の諸本には、高松宮旧御所蔵の旧有栖川宮御本で、現在国立歴史民俗博物館保管本中に写本三部が伝存する。この三本とも本文内容に異同の少ない、ほぼ書写形態も等しくする転写本である。この三本を便宜上(イ)、(ロ)、(ハ)に区分すると、(イ)本は「加製御百首」と題し他本とは外題と文字に少異が認められる外、他本の十二行書の箇所が修正されて十一行書となっている。(ロ)本は前半部分の字形が本書に極めて類似する。これは筆者が当初臨摹しようと試み途中で止めた形跡がみえるので、本書を親本とした可能性が強い。もっとも本書と近い関係にある伝本と言える。(ハ)本は他本とは文字に少異が認められる程度であるが、元文三年の職仁親王の書写奥書を有し、親本が中院通躬所持本であることが分る。その奥書は「右一冊者中院前右大臣所持也、頻乞受令書写之早、元文三年臘月三日中務卿（花押）親王」とある。ちなみに中務卿とは霊元天皇の第十七皇子で五代有栖川宮を御相続された職仁親王であり、中院前右

大臣とは、霊元天皇から歌道の御講釈をうけられた中院通躬である。

その他、本書の写本ではないが、本書の御製を所収する歌集で『列聖全集』には収載されなかった当部所蔵の『霊元院御集』（書陵部函号五〇六・二六類題集）十三冊と、旧有栖川宮御本に『桃蘂類題』と称する一冊が伝存する。後者は、第百十五代桜町天皇が霊元天皇の御製を部類編集せられたもので、延享五年に近臣に命じて清書させた旨の本奥書と、寛延元年十一月七日の職仁親王の書写奥書がある。本書の関連資料として記しておく。

天皇の御製は、寛文三年二月十二日和歌御会始に、御年十歳の時お詠みになられた「うぐひすの声ものどけき久かたの雲ゐの春は千世も限らじ」の御製から、本百首の「おさまれる時は穂にそふ穂もおひてさかへむ千世のあきつすの国」まで、およそ一万数百首を数える。本百首には、特に御悩のことを詠まれたと思われる御製は見受けられないが、

何事もうつればかはるほどなくて過し八十の夢の世の中
木葉よりもろくもやがてさそふべき老はわが身の末の秋かぜ

など、老境の御感慨をお詠みになられた御製十数首を収める。

本百首の御企てについては、天皇の御著作『麓木鈔』に「逍遙院歌、今の世の手本也」とか、「一年中に遅速かけて、三四百首ばかりもよめは、よきけいこ也」等と記し、あるいは、天皇の言として「古より今世に至るまで歌人と称するに定るものは人麿、貫之、定家、逍遙院（実隆の諱）及朕の弟子実蔭あるのみ」と伝えられ、宸写の実隆の歌集『再昌草』の奥書にも「抑、逍遙院内府者、京極黄門已来、当道無双之堪能、独歩于世之歌仙也」と実隆を歌仙と称するなど、天皇から歌の御手本、かつ歌道の無双の堪能者とまでに称賛、尊敬せられる先達の実隆が、六十歳の時『建保三年名所百首』と同じ題で詠まれた永正十年の『名所百首』と、年次不明の『百首』に、永正六年の『一夜百首』等と同じ題で、本書は試詠せられたものである。

本所外題の「加制」とは、奥書の「而加二制止一之間、暫及二延引一者也」に依拠するものであろうか、現在のところ確証が得られない。これらについての考証は後日に期したい。とにかく、本書が天皇の自筆本と目されるので、御自ら名付けられた御外題と言うことになる。

天皇の御歌風は、いわゆる元禄以後興隆をみた革新諸派の歌風に対して、堂上地下の間で依然として行われ守られてきた二条派の旧派に属するもので、天皇の御歌は必然堂上風のものが多い。また帝王として相応しい雄偉な御作であるとも評されている。幼少の時、殊に和歌に御堪能であらせられた御父後水尾天皇と御兄後西天皇から和歌の御指導を受けられ、天和三年四月十六日御兄天皇から古今伝授をうけられた。そして正徳四年五月には武者小路実陰（三条西実条の二男）に古今伝授を相伝せられている。その際は、五月四日から二十二日間、ほとんど毎日休まず御講釈をされた程の御熱心さで、同席聴聞された中院通躬には何故か御相伝されない。その他にも『伊勢物語』、『天仁遠波』等の御伝授、また作歌の心得を説いた『詠歌大概』や、『未来記』、『孟子』、『百人一首』等の御講釈を宮中でしばしば催され、その中から実陰をはじめ中院通躬、烏丸光

栄、冷泉為久等の秀でた歌人が輩出している。また天皇は多くの歌学書を著される等、御教養の深さ、広さを窺わせられ、御生涯を通して歌道の振興に御尽力せられた御熱意と御功績は大きいのである。

天皇の御歌は、『翁草』に「此の君敷島の道にたけ玉ふ事、代々の帝にたぐふべくも非ず」と評されるように、近世和歌文学史上における評価は極めて高いのである。

かく和歌に御造詣の深い天皇は、後水尾天皇の第十九皇子、承応三年五月二十五日（一六五四）御誕生、御幼名を高貴宮と称せられ、御母は新広義門院藤原国子である。明暦四年正月二十八日親王並びに二品宣下により御名を識仁と賜わる。寛文三年正月二十六日後西天皇より御受禅、御年十歳で即位せられた。御在位二十五年にして貞享四年三月二十一日東山天皇に譲位せられ、正徳三年八月十六日には、御落飾して御法諱を素浄と称せられ法皇となり、享保十七年二月上旬より初められた『名所百首』の春歌の半ばを過ぎた頃から御不例となられ、閏五月二十七日に至り、七箇日間の七社七寺に御祈禱を仰出されたり、下御霊社神主の御加持、御薬献の効、人々の御祈願の効験もなく、天皇が本書奥書に「古来之病及三百日一者為三悠久一事」と御心痛になられたように、八月六日（一七三二）御年七十九歳をもって崩御あらせられた。御遺詔により孝霊、孝元の二帝の諡号の二字をとられて霊元天皇と追号せられた。

天皇は、御父天皇の御好学の資質をうけて、生来英明な上に学問を好ませられ、歌道、漢詩、能書、絵画、舞踏など多趣多芸に渉らせられた。殊に和歌と書道には御堪能であらせられ、東山天皇に能書方を、中御門天皇、真敬、幸仁、尊賞、尊祐の各親王に入木道を、家仁親王には密に舞踏を各々相伝せられている。

御著書については、数が多く、そのすべてをこゝには掲載できないが、前掲のものを除いて、一部を記載すれば、御製集の『桃蘂集』を初め『乙夜随筆』、『作例初学考』、『元陵御記』、『奥尽御抄』等が知られている。この他に天皇の御詠草、御消息、御自ら宸写せられた歌書、物語等の宸翰類を加えると、現存するものだけでも枚挙にいとまがない程である。また、天皇は、朝儀旧典の復興にも御心を用いせられ、その典儀には、朝仁親王の立太子の儀をはじめ、女御房子の皇后冊立の儀、東山天皇の御即位に当っては、大嘗会等がある。

なお、筆跡の鑑定などに当っては、是沢恭三、橋本不美男、辻彦三郎諸氏から多々御教示をいたゞいたことを記し、謝意を表したい。

凡　例

一、翻刻に当って、歌題、和歌等の書式は原本の形態通りとしたが、奥書は、私意により読点を付した。

一、異体字、変体仮名等は現行の文字に改めたが、仮名遣は原本の通りとした。（例　烋→秋、哥→歌、鴈→雁等）

一、丁数は」一ゥの形で明示し、また『名所百首』については、列聖全集掲載本と対校し、その異同を右脇に（　）を付して注記した。

（石塚一雄）

「加制三百首」（外題）
百首　享保十七年自二月上旬至三月下旬終功

春二十首

音羽河

氷ゐし浪も岩こ(以下欠)すをとは河吹そめけりな水の春風

玉嶋河

をとめ子か住らん里やいつくそと玉しま河のかすむ水上

高砂

なかき日はまた高砂の尾上よりまたれてかすむ鐘の一こゑ

春日野

名にしおふ山よりつゝく若草の緑にもゆる春日野の原

三輪山

雪うつむ梢もはやくみとりにて春のしるしを三輪の杉村

葛木山

世にゝすや花も柳もさほ姫のかつらき山の春のさかりは

手向山

若葉さへまたしき春の手向山もみちの秋や神も待らん

伊勢海

のとかにも吹神かせのいせの海になかき日くらし貝やひろはむ

志賀浦

しかのうらやみ(お)をくるすゑは行雁(の)のつはさ(は)にまかふ沖のさゝ浪

三嶋江

つのくむをみしや幾日の兼へとてみとりをひたす三嶋江の波(かせ)」一ウ

塩竈浦

こく舟もいつくはあれといつはあれと春のあけほのゝし(ナシ)ほかまの浦

宇津山

蔦楓おち葉のまゝの春(に)はまた道せはからしうつの山越

葦屋里

このほとはあしやの海士もいさりせてわかすむ里の花やみるらん

吹上浜

花にうき吹上の浜のはま風(春)もちりしく時はゆるしてやみむ

湯等三崎

行ゑ(へ)なくかすむ波路やたとるらむゆらの御崎の春の舟人

忍山

いはつゝしいはぬ思ひも色に出て名のみ忍ふの山にさくなり

水無瀬河

みなせ河その世の春のおも影もありて行瀬に月やかすめる

大淀浦

おほよとの波ものとけき春の日に何をうらみて帰る雁かね

田籠浦

名にたかき田子のうら藤(波)わか物とかさしもおらてあまやみるらん

末松山

あら玉のとし波こえてこし春も今は日かすのすゑの松山

夏十首

大井河」二ウ

夏衣たゝめる色をおほゐ河ゐせきにしろくみする浪かな

信太杜

千枝ことに聞ともあかしほとゝきすしはし信太の杜にやすらへ

猪名野

影やとす露もをきあへぬ夏苅(狩)のいなのをさゝのみしか夜の月

御裳濯河

世にいとふ夏もしらてや神風のみもすそ河は清く涼しき

伊香保沼

此ころのあやめにかほるいかほかせしらぬもしれとふかぬ日そなき

天香九山

さみたれの雲の衣手みねはれていつよりほさむあまのかく山

大江山

分ゆかは道こそあらめ大江山いく野の草は夏深くとも

難波江

光ある玉藻とやみむ難波江のあしの下根にすたく(かる)螢は

美豆御牧

行人のしろきをみても花の名はとはぬみつ野に咲る夕顔

松浦山

今こむも西こそ秋とまつら山夕日(へ)に夏の何のこるらむ

秋二十首

初瀬山

吹かせそ(に)音かはりける初瀬やま檜原は秋の色わかねとも」三ウ

竜田山

いつしかと朝夕きりのたつた山今いくかありて木々は染らん

須磨浦

をとたてゝ関吹こゆるゆふへより秋は身にしむすまの浦風

宮城野

みやき野の木のした露も心あれなもとあらの小萩うつろはぬまは

水茎岡

妹とねし秋の朝けはくすの葉のうらみもあらし水くきの岡

小倉山

鳴鹿のたちともくれてをくら山さそ妻恋のみちまとふらし

宇治河

今朝みすはうちの柴舟こゝかしこいさよひかはる浪のうき霧

常磐杜(山)

秋ふかきときはの森のしつくにも下くさのみや色かはるらん

三室山

幾秋をよそにへたてゝ神かきのみむろの榊色もかはらぬ

高円野(山)

たかまとの秋やむかしの風ならて分る袖なき野路のしの原

伊駒山

常よりも曇みはれみいこま山冬まちあへす今朝はしくれて

生田池

とはましといひけむ杜の秋風をいく田の池にみするさゝ浪」四ウ

清見関

きよみかた影はとゝむる月もやゝあくるなこりのなみの関守

武蔵野

いく千さとなひく尾花そ分出る月のこなたのむさし野の原

伊吹山

月のゆく空にそとをき嵐ふくいふきの高根雲はらへとも

佐良科里

これも又なくさめかねてうき秋のゆふへさらなるさらしなの里

白河関

たひ人や紅葉をみてもふる郷の都の秋をしら河の関

野嶋崎

影よはき野嶋か崎の秋の日にあまの衣手ほし佗る比

明石浦

みるめなき妻やうらみてあかし潟なみのよる〳〵をしか鳴こゑ

阿武隈河

年波の立かへりてはあふくまに秋をやらしとせく水もなし

冬十首

清滝河

冬きぬと山分ころもをりそへて今はた誰かきよたきの水

小塩山

年たかき木すゑにをよふ陰もみむ小塩の小松霜をかさねは

住吉浦」五ウ

猶のこる菊も秋みし色ならて雁かねさむき住よしの浦

片野

むかしこそ今はかた野の御狩場に鴫も錦の羽をちらしけむ

田蓑嶋

なれも名をたみのゝ嶋にたのみてやしくれに来つゝたつの鳴らん

有乳山

矢田の野の嵐やしのく山風のをともあらちのふもと行袖

浮嶋原

かきくらしふれとたまらぬ波のうへに雪一むらはうき嶋か原

安達原

降つもる雪分まよふみちのくのあたちか原にとふ宿もかな

因幡山

影さむく出ていなはの峯におふるまつともなしや冬の夜の月

鏡山

かゝみ山やつるゝ老のかけも猶そひてやそちにこゆる年波

恋二十首

伏見里

住里もへたつる中にくれ竹のふしみてふ名を思ふはかなさ

霞浦

あまならぬ袖をそぬらすほのかなる霞のうらのみるめはかりに

石瀬杜

むかひてはえもかたらはて人つてにいはせの杜の名をたのみつゝ」六ウ

筑波山

心をそつくはの山に年へぬるこのもかのもの陰によりても

袖浦

ぬれそひて後そしられしあまならぬ袖のうらなみかくる物とは

益田池

うき思ひます田は人のつらき世にいける我身の名にこそ有けれ

高師浜

心こそたかしの浜のあたし波かけてをよはぬ人恋る身は

阿波手杜

うしや身はつゐにあはての杜の名をもらすはかりの契りなりけん

志香須香渡

人こゝろかはすそたのみしかすかのわたりはてすはあらし行すゑ

浜名橋

わたりえぬはまなの橋のはし柱おもひくちなんためしまてうき

磯間浦

うらめしないそまの海士のいさり火のほのかにみつる契りはかりは

守山

色かはる涙もいまはもる山の木葉よりけに袖や染まし

佐野舟橋

わか中はたかさくるともとにかくにかよひてゆかむさのゝ舟橋

安積沼

世の人はなへてこゝろの花かつみあさかの沼のたくひにや思」七ウ

松嶋

あふことを色もかはらて松しまの波にいつまて袖ぬらすへき

緒断橋

あらすなる行ゑいかにとしら波のをたえの橋のかけし契りは

三熊野浦

わか中はうき浜ゆふのいく百重へたて心をみくま野のうら

鳴海浦

我そ今はおほよそ人になるみかたなみの心はあともとまらて

二見浦

人こゝろふたみの浦のかひなさもしらてそ波の身をくたきける

名取河

いひさはく世に残るへき名取河瀬ゝの埋木身はくちぬとも

雑二十首

芳野河

よし野河よくみて清き心をはしれかし花のおりならすとも

鈴鹿河

すゝか河八十瀬まちかくなれるをそふりぬる身にもさらにおとろく

不尽山

いかなれや絵にかく筆のをよはすとむかしの人もいひしふしの根

還山

故郷をおもひこし路の旅人はかへるの山の名をたのむらし

「海橋立」八ウ

橋立やのほりての世は天人もこゝにみるめをめてわたりけむ

飛鳥川

淵瀬ある世になからへて飛鳥河身はいたつらにをくる年月

鳥羽

ありし世の鳥羽山松はくちぬらんそのふたゝひの名をのこせとも

辰市

うる道のありてこそ身をたつの市にさはくなこゝろ事にふれても

吹飯浦

をのか妻まつ夜ふけぬのうらみをや月にかこちてたつの鳴らん

布引滝

千尋とかいはかさなれる峯よりもおちて名たかき布引の滝

長柄橋

くちせぬは橋の名のみそなすことのなくてなからの身にはとゝめし

玉河里

すむ人のこゝろにみかく光あらは名におふへきを玉河の里

生浦

花にさき実になる秋をみむことやたれもかた枝のおふの浦なし

佐夜中山

都人ねぬらん今をたひにては夢より後のさ夜の中山

嵯峨野

嵯峨野わけ花も紅葉もいかてみむ千世のふる道あとはある世に

「角田河」九ウ

都とり今もありてやすみた河いさことゝはむわたる舟人

餝磨市

つねにたゝあらそひたつや市人のしかまのかちにそむる心は

若浦

いたりえぬわかの浦路にかきつめてみるかひもなき藻くつならすや

会坂関

三の関かためぬ世にはあふ坂の杉のした行道ひろくして

三津浜

百のかすみつのはま松みるへくもあらぬ老木のおち葉なからに

右百首従二月上旬之末至三月下旬終功

逍遙院内府詠此題之時、六十歳許歟、奥
書云、此百首依難得風情、往年以来未詠
之云々、先達尚然、況愚昧之末学雖為過
分之企、百首古来之題、大概依詠之、慾欲綴
見之、春歌過半書付之処、先月中旬俄違例、
成大腹痛、経一夜之後漸而止、其以後或両三日、或
四五日雖隔之痛猶発、瘧母之所為也、不発時
者、又似平日、仍空累日之間、且為慰永日之
退屈、且為癈世事之雑慮、只任一念之所
向、而連〻綴出之、尤無一首之可取、後日若
及外見者、速可得嘲哢為必然而已」一〇ウ

四月十三日草之

此一巻尤至而草稿也、後日猶勘等
類等改正之上、若可及清書歟

（一行分空白）

百首同年自四月中旬至閏五月上旬終功

春十五首

元日宴

門ひらくこえのうちよりのとけきはおりにあふ今日の春にも有かな

余寒

風霜はみ冬つきぬる日かすにもあまりて幾日さえのこるらん

春氷

日かすみぬ木のした水のあさ氷とくるもまたぬ春かせそふく

若草

春の色のまた初草を野へにみてこのめをそしといそく比かな

賭射

初春のよそひめつらしあを柳の葉をもいつへき雲のうへ人

野遊

おもひあへぬ梅折かさし鶯の音にさそはるゝ野への日くらし

雉

ともねやはかた山きゝす山とりに何そはにたるつまこひに鳴

雲雀」一一ウ

入といふ雲路やならふたつひはり春のわかれはまた寒き野に

遊絲

ちりはかりまかふ物なくはるゝ日に何のみたれてあそふ糸ゆふ

春曙

もろこしにめてしことの葉みぬ程やたゝ我国の春のあけほの

遲日

うらやまし物うき老のつれ〳〵もしらてまなふる窓の日なかさ

志賀山越

麓まてひとつ色香になりぬへし花そのちかきしかの山越

三月三日

くみそへよけふ咲枝をさすかめの花も時しる桃のさかつき

蛙

にほひある声に鳴なりちる花のうきてなかるゝ水のかはつは

残春

いかにみむ有明ほそき山のはのかすむやよひも一夜ふた夜を

夏十首

新樹

わかみとり今はへたてす春秋とをのか時わく桜もみちも

夏草

みとりのみしける草葉を分る野に花めつらしきさゆりなてしこ

賀茂祭

あふひとるまつりも今はとしことのつかひにきはひ世の物見にて」一二ウ

鵜川

すゑつゐに暁やみの身をしらて何いとなみのう舟さすらむ

夏夜

はらへとも跡よりすたくかの声にふすかとたにも夏の夜の床

夏衣

此比のあつさにたへぬ衣手はうすきもかろき物としられす

扇

さらぬたに手をははなたてくらす日に秋かせさそふあふきなりせは

夕顔

山かつのかきほならてそみまほしき名も人めける夕かほの花

晩立

こゝまてはふらぬもすゝし夕立のなこりはれたる山のみとりに

蟬

影のこる木すゑの夕日よそにしてこのしたしけく蟬の鳴こゑ

秋十五首

残暑

秋きてもまた袖ふかぬ初かせをくるゝ夜たにといくか待らん

乞巧奠

秋風のしらへをなかはわくことのをたえも久し九重の庭

稲妻

心あれやまたほに出ぬよひ〳〵に田面もよほすいなつまのかけ

鶉」一三ウ

山かけにあらぬ袖まて秋のかせさそ身にしみて鶉なくらむ

野分

心こそ千種をおもひしほれけれ花はまたみぬ夜の野分に

秋雨

風ふけはさそはれやすき村雨に秋さむくなるはしめをそしる

秋夕

思へかし夕ならては何のうへもまことに秋の色はみえぬを

秋田

かりあけし田面をひろみ廬ことにかけほすいねの所せきまて

鳴

たれきけとおもはぬ鳴の羽かきをうきね覚する身にかそへつゝ

広沢池眺望

塩かまのむかしの秋はいさしらす都の月の広沢のいけ

蔦

をのかうへにめとまる色そ松かせもよきてふかなん蔦のもみち葉

柞

はゝそ原それといはたのをのつからうすき色にもそむ心かな

九月九日

残るとてあすおり過る名はたゝしけふつむ菊の袖のうつり香

秋霜

露をこそあはれとみつる草のはに冬またぬ霜のをきそむる色

暮秋」一四ウ

色かはるあさちにのこる虫の音もかれていくかの秋のくれかた

冬十首

落葉

おしとみてはらはぬ庭の紅葉ゝもふりそふしたに色やあせなん

残菊

花はなをちらてしのこるしら菊の秋なき色に何かはるらん

枯野

かれたてる尾花かさまもさむき野にみるめのまへの風そ吹しく

霙

めつらしくましりし雪の降そひてしろきを後の夕くれの雨

野行幸

出たつをみれはたかかひ犬かひのよそひゆゝしき御狩野の原

冬朝

夜をかさねさえまさりきて朝手あらふ水も氷をくたく比かな

寒松

としさむきあらしは松のこゝろさへかはるはかりに吹しほりつゝ

椎柴

山人のかる手にのこす椎柴もさはく夕の峯の木からし

衾

常よりもね覚そはやき老の身はひとりふすまの下さゆる夜に

仏名

一とせのつみもきえねと御仏の名をきくことやさためそめにし

恋五十首」一五ウ

初恋

何ゆへにけふかけそめし涙そと袖のおもはむこともはつかし

忍恋

しのひ来てあはれとしへぬこれも又心のほかのこゝろならねは

聞恋

身にしるもおもふにはかなよそなからあかしの波のかけし心を

見恋

その人とまかはすなから今一めおもひあはせんおりもあらはや

尋恋

心あてのあたりまてこそたとりてもをしへぬ門はそこととはれす

祈恋

貴船川神そしるらんいのる瀬にちる玉よりもくたく心は

契恋

ちきりをけはやかてと思ひし日数こそ名こりなきまてとをく過ぬれ

待恋

ならはねはいつはりしらてたのむこそ待夜ふけ行はしめなりけれ

遇恋

新枕人つてならぬむつことに心のかきりいかてつくさむ

別恋

恋しなん身にはこれをやかきりかとなこりあやしき今朝の別路

顕恋

おもひあまりたゆむ心の色をたかみとかめしより世にしられけむ」一六ウ

稀恋

あれはある逢夜もいへは五月雨のくもまのほしをみるたくひにて

絶恋

なこりなくとちめし人のつらさゆへたのむ心の道もたえつゝ

恨恋

さま〳〵におもひしことはむかしにてうらみひとつにのこる心よ

旧恋

年もへぬたてし千束の錦木はそことしられす朽やはてけむ

暁恋

おもひ出むこれより後のいかゝみむつらきなこりの横雲の空

朝恋

うれしとそみてかへりつる朝ねかみ思ひみたれし人のこゝろを

昼恋

今朝のなこり待夕くれも程とをきいまのおもひのやるかたそなき

夕恋

時わかぬおもひよこひよいつはあれと夕そさらに身をくたきける

夜恋

いつまてのうき日とかねとしらぬ身にかく恋あかす夜をやかさねむ

老恋

わすれねよ老てやさしと思ふ身の色にめとまるくせもわりなし

幼恋

なひくてふ心もいまたわか竹の世なれそむへきおりをこそまて」一七ウ

遠恋

行かよふ心のみちにさはらてもいくそみ山を隔るはうき

近恋

おり〳〵はみかはすほとの中にしもなとか人めのせきをもるらむ

旅恋

ひとりねはもとより旅のうきわさをおもふ人ある身にわすれ来て

寄月恋

影やとすよすかに袖をとひなれて涙すゝむる有明の月

寄雲恋

しるらめやはれぬおもひの雲たにもそなたのそらとむかふ夕を

寄風恋

思ふその身にあやなくやふれさらんわれをこすもる風になすとも

寄雨恋

とり出てみれは中〳〵心まてしめる雨夜のねやの玉つさ

寄煙恋

うらにたくあまのもしほもみぬ人にみせはやもえて恋の煙を

寄山恋

うきをうらみつらきにたへてさま〳〵のなけきこりつむ恋のしけ山

寄海恋

わかこふる心のそこをうみよりもふかき物とはいかてしられん

寄河恋

せく袖のうへになかるゝなみた河いまは何をかしからみにせむ」一八ウ

寄関恋

我中のへたてこゝろは年をへてよそにのみきくあふ坂の関

寄橋恋

あふとみるまれの一夜のほとをたにわたしもはてよ夢のうき橋

寄草恋

いかてわか恋をわすれんすみよしのきしに名たゝる草はつむとも

寄木恋

えにしたにあらはとたのむあふせかな亀のうき木のためしはかりに

寄鳥恋

こむ世こそ待ことにせめ天にありてはねをならふる鳥となりせは

寄獣恋

とひゆかはやとはなさけのふかき夜に門もるいぬのこえのわりなさ

寄虫恋

暮ことの軒にすかくもくへき夜のしるしはみえぬさゝかにの糸

寄笛恋

しのひえすなりぬるものを笛竹のよにしられても音をやたてまし

寄琴恋

うきおもひいまも行手にあらはれはわかつまことをいかてきかせむ

寄絵恋

かきりある筆にはえしもそれとやはうつしとるへき人のおもかけ

寄衣恋

年月のなみたやほすと一たひは衣手かへてぬる夜半もかな」一九ウ

寄席恋

これをさへつらき物とやしきすてむ待夜かさなる床のさむしろ

寄遊女恋

人わかぬ心うきたる舟のうちにみしなこりとて何こかるらむ

寄傀儡恋

むすふらん契りもはかな行くらす野上の里のたひねはかりに

寄海人恋

あまのかる手もをよはしよわれにうき心の海のそこのみるめは

寄樵夫恋

われならはうきにやつらき人はみむたきゝの花も身にをはすとて

寄商人恋

あふことにかへてうれしき今よりやよにうき名をは辰の市人

此百首享保十七年四月十六日先詠巻頭一首、至閏五月朔日終之、病悩過半雖似治之、全快猶未知其時日、既過百日、古来病及百日者為悠久事、豈堪積齢哉、開齢事者、古今序所謂、詠歌慰心之一句、誠今古之名言、於愚身殊感心、常所受用也、仍雖為早詞俚語之至、如形綴出之、於等類者、纔考六百番歌合、逍遙院内府詠等而已、只可耻〻〻」二〇ウ

百首自閏五月下旬始之

春二十首

年内立春

七十をかそへのこせる年の内にやよめつらしき春もきにけり

早春霞

春いくかしのふの衣つゝみえぬ色にやけさはかすみそむらん

子日松

子日してけふは小松と引手にもおもかけこもる千世の木たかさ

雪中鶯

ふりうつむ色こそみえね鶯のはつねあらそふ枝のあは雪

野若菜

たかはやくつみいれしをか初わかな野へはあまたの袖の中にも

梅風

いつくにも今さかりとや吹たひに梅か香ならぬ春風もなき

柳露

糸にぬく玉かとみえてをきそへは露にもたへすなひく青柳

春月

これも又春のものとてめてさらは月のためうきかすみならまし

帰雁

秋にこそ心をよする雁ならめ春をみすてゝなとかへるらん

春雨

ぬるゝともみわかぬほとの夕暮に木のめそけふる春雨の庭」二一ウ

寄雲花

花なれやおもひもかけぬ山のはの木〻のなかはにまかふ白雲

寄霞花

世にみせてかすめる花かさほ姫のつゝむたもとにあまる色かを

寄露花

露とゝもにあまる匂ひもこほれつゝ花おもけなる朝ほらけかな

寄月花

心あれやなか〳〵花にあらそはて春しも月のおほろなるかけ

寄風花

うつろふをうち吹からにちかゆけは風をも花の心とそみる

寄雪花

白妙にちれはそれかとこそみしにおもかけかへす花の雪かな

春田

くるしともいとはぬ民や春ことに山もとひろくかへすあらを田

河款冬

玉川のなかれたる名も花はなをいはぬ色にそさける山吹

松藤

名のみきく十かへりよりも松にさく花とやいはむ春の藤なみ

暮春

花とりの行ゑもしらすたれこめてことしはあたにくれし春かな

夏十首

夕卯花」二二ウ

かけなくて咲そふ枝もひたすかと夕波しろき峯の卯花

卯月郭公

今はたゝしのひねもらせ郭公卯月のかけも有明の空

夜廬橘

むかしおもふ心もふかきまととひて夜こそまされ匂ふたちはな

五月時鳥

里つゝきふけるあやめの軒端をやえも過かてに鳴ほとゝきす

五月雨

いく日をかくらしわふらんたか里もおなしさつきのはれぬなかめに

夏草

打なひきしけれ夏草秋ちかき露と風とにまかせてをみむ

夏月

たとへてもあふきにふかぬ秋風の袖におちくる月の下ふし

螢

空たかくのほるは星の光もて天の河辺にゆくほたるかも

夕立

しはしのみふりきてよそに鳴神のをとまてさそふ夕立の雲

納涼

日をさふる木の下すゝみこの夕まちあへぬ袖に風も吹きて

秋二十首

初秋露

けふはまた秋の日かすの浅茅生に時しる露をあはれとそみる」二三ウ

閑居秋風

身を秋も風はしるとや世の外にすめるむくらのおくをとふらん

野草花

此ころの秋は野もせのさかりにて千種のにしきしく物そなき

夜虫

ふけゆけは猶うき秋の思ひあれや夜なく虫のこゑもおしまぬ

暁雁

くる雁はこゑのうちにもそれとみぬ嶺にまかへてわたるよこ雲

深山鹿

つまこひをしのふのおくの鹿のねもいほさす人のあらはきくらむ

杜月

しはしこそ月にうなての杜の名もわすれてのほる影をまたなん

河月

みつゝゆく袖さむきまて楸おふる河原の月の影きよくして

浦月

すまあかしはれぬる月の今夜たれ心にのりて浦つたふらん

嶋月

波の上のくまならてそふみるめあれや月にさはらぬおきつ嶋山

江月

いつしかと兼のかれ葉の秋風にかけもさひゆく難波江の月

山朝霧

山は今朝八重たつ霧のおくにたれはれぬなかめをいとゝわふらん」二四ウ

海辺擣衣

あま衣ひとへにいとふ夜さむとやもしほもくまてうちしきるらん

田家秋寒

此ころの秋やいねかてひろき野の風もふせかぬ民のすまゐは

野草欲枯

ほとなしや此ころ霜のをく野へにやゝ秋ならぬもゝ草の色

庭菊

二葉よりうへし籬のけふの菊つまてそみつるめつるあまりに

雨中紅葉

ひねもすの雨にぬれたるもみち葉はこれそ千しほのかきりなるへき

河辺紅葉

もみち葉のうつる河岸水はやみさそはぬかけもおしき色かな

山家暮秋

廬なれし鹿さへうとき夜ころへて秋なき山の秋の暮かた

閏九月尽

かそへすはかさなる名のみ長月のけふくれぬともしらしほとなさ

冬十首

初冬時雨

ふらぬまもしくれめきたる雲風のそらにしくるゝ神無月かな

谷落葉

降うつむ千重の落葉に木こりさへかよひかぬへき谷の下みち

寒草霜」二五ウ

草はみなかるゝかうへにくちねとや日ことに霜のをきまさるらん

篠霰

はけしさは霰にあらぬさゝの葉もともにくたけてちるはかりなる

池氷

ちりあくた木葉かちなる池水のにこりにしまぬうす氷かな

冬月

またよひの霜もあらしもみるかうちの空にみちたる冬の夜の月

河千鳥

鳴ちとり風はいつくもさむき夜の河辺をなにゝ行かへるらむ

行路雪

かち人の道のなかはにふりいては幾たひ袖の雪はらふらん

里雪

雪ふかみけさのる駒はあをとせて過る木幡の里の板はし

歳暮雪

かきくらしあすもふらなんけふの雪くれ行としの道まとふまて

恋二十首

忍恋

しけるとも心のおくの色みえてみたれなそめそしのふもちすり

見恋

しられぬはあやなき物をたゝひとめみすもあらすといかてつけはや

不逢恋

かくてのみこの世つくさはあふまての契りは後の身をやまたまし」二六ウ

待恋

こぬ人のいつはり幾夜ならふ身は鳥か音をのみ待ことにして

後朝恋

かへるさの思ひくたけし玉しゐやけさ道しはの露とをくらん

久恋

いひそめていく月日をかすきの門さすかに人もかそへしらなん

変恋

あらすなる色よなさけの露かけていひしことの葉秋もへなくに

忍絶恋

人しれぬわかうき中のかよひちはあるにもあらてつゐにたえにき

寄秋月恋

めてゝみしおもかけふかく身にしみてなを秋の夜の月そかなしき

寄秋風恋

ひとりぬる幾夜をさむみこぬ人のうきにたへぬはたゝ秋の風

寄秋露恋

恋しさはいつとわかねと袖にをく夕の露も秋そひまなき

寄橋恋

よそにてもあはれとみすやよな〳〵のわか心しるうちの橋姫

寄涙恋

せく袖のうへになかるゝ涙河今は何をかしからみにせむ

寄関恋

わか中はへたつる物となりはてゝきく名もつらしあふさかの関」二七ウ

寄心恋

としをへてわかうこきなき心こそめにみぬ恋の山つくりけれ

寄衣恋

みるもうき人の心のうす衣一夜かさねしなこりはかりに

寄鏡恋

あはれその人にかへはやますかゝみむかへはをのかやつれぬるかけ

寄舟恋

見るめあらは千重の波路もわけゆかむ舟こす塩に身はしつむとも

絶恋

さゝかにのいとなこりなく絶はてゝかきつくへくもあらすなりぬる

恨恋

今もなをわすれかねぬるうらみのみいふともなしのひとりことにて

雑二十首

関鶏

鳴とりのゆるすや声にまかせてやもらぬ関路をこゆる旅人

名所鶴

明わたるそらもなきてや鳴かはすうねのゝたつののとかなるこゑ

名所松

かきつらねみれはこれもやわかの浦の松のことのは色はなけれと

名所橋

人の世にあやうき道のあれはこそありけるものをきそのかけ橋

名所滝」二八ウ

御幸せしその世も今はことふきの千とせまちかくふるの滝つせ

名所浜

いかてかとおもふ千尋のはまへにもひろふかひある玉はましらす

羇中雲

けふはまたわくるもふむも峯の雲袖ももすそも打しほれつゝ

旅泊

しのきこしいく浦〳〵も波風の身にそふうきねかはる夜そなき

漁舟火

いにしへのこと葉を今も光にてむかふ兼やのあまのいさり火

眺望

打いてゝみれは心のはてそなきしらぬ野山のあさけならても

故郷雨

いかにそとふるさと人に身をなしてあはれ一夜の雨をきかはや

山家嵐

世のうきに聞かへむとて住山のあらしもやかていとふはけしさ

田家水

春の水せきあまりにしおもかけも秋よりかるゝ田面をそ思ふ

暁夢

はかなしなおとろくかねの声のうちにさめてわするゝおもひねの夢

懐旧

末の世にうまれぬる身のむかしたに今にはまさることそおほかる

寄夢述懐」二九ウ

何事もうつれはかはるほとなくて過し八十の夢の世中

秋述懐

木葉よりもろくそやかてさそふへき老はわか身の末の秋かせ

神祇

天つ神地つ神代のはしめよりさためをきける道はうこかす

釈教

はかりなき命ある国をしらせてそ此世さりにし仏なりける

秋祝

おさまれる時は穂にそふ穂もおひてさかへむ千世のあきつすの国

此百首逍遙院内府一夜百首之題也、試詠之、於気力者聊雖有余、浮腫未減、動揺起居依難任心、尤難廻思案、何日可得全快哉、此数篇猶以見苦、早可令破却之処、病中詠三百首事、古今未曾有之由、人〻令申之、而加制止之間、暫及延引者也

（六行分空白）」三〇ウ

（七十八枚白紙）

（巻末七十七枚目に「皇統文庫」印あり）